

カタチに出来ない想い



yukishigurevo

駅。

ローファーの先でそっと、白線をなぞる。

電車がホームに入ってくると、ゴムが焦げるような独特の匂いが鼻をついた。冷たい空気がマフラーを揺らして流れていく。

足元に止まりそうなドアを目で追いながら、同時に車内の込み具合も素早く確認する。「いいかも」と呟いたのは心の中。

その数秒間、君を放ったらかしていた事に気付いて隣に目をやると、君も前を見ていた。

もしかして、同じ事を考えてたのかな？

部活のある日はだいたい、帰宅ラッシュに重なる。当然、座席はサラリーマンやOLたちで埋まっていた。

大人。別世界にいる人たち。ずっと別世界でありたいと願う。

乗り込んですぐにサラリーマンの背中に突き当たった。入ってきたドアと向かいのドアの、ちょうど中間。

「それでね……」

君が再び話しだす。くるくる変わる表情に見とれて、相づちが遅れないように気を付けながら、それを聞く。

ふたりを隔てるひとり分の空間が疎ましかった。

がたん、ごとん。

リズムにあわせて君の身体が揺れる。顔にかかる髪が揺れる。

手を伸ばせば届きそうなほど近いのに、失うのが怖くて触れられない。

もしカタチにしたら、それ自身の歪さに耐えきれず、すぐ壊れてしまう。きっと。

気になっていた事があった。できるだけ自然に、適当にクラスの男子の話を挟んでから、聞いた。

「そういえばさ、昼休み、榊君に呼び出されてたね」

ちょっと声が上ずった。でも、いい。言えたから。

「んー、コクられた」

予想はしていたから、動揺は隠せた。榊君は、クラスでもわりと人気がある。君と榊君が付き合ったら、きっとお似合いだな。並んで歩くふたりを思い浮かべて苦しくなった。

なんて返事したの？ って聞く流れ。でも、聞けるわけない。

「ふーん」絞り出すような声でそう言うのがやっとだった。

「断ったよ」

そっけなく言って中吊り広告に視線を逃がした君の横顔は、少し不満そうに見えた。私のせいかな、なんて。うぬぼれてて、ごめん。

途中の駅に着いた。大きな駅。たくさん人が乗りこんで来る。

ぎゅう――

ふたりの体が密着した。

期待していたのに、いざとなると緊張する。君の顔がくっつきそうなほど近い。

“コロッ”。君が口の中で飴を転がすと、薄く開いた唇から苺の匂いが微かにもれた。

ばくばくばく……

体中に響く心臓の音を君に聴かれてしまいそうで、息を止めていた。でも、すぐに苦しくな  
って大きく息をする。

「大丈夫？」

心配そうな顔を向ける君。思いがけない収穫に、罪悪感を感じながらも顔がほころぶ。

留守番を告げられた小犬のような、こんなしおらしい顔を君が見せる相手はクラスに何人もい  
ない。

自信を回復したおかげで、スピードを出しすぎていた鼓動も平常運転に戻ってきた。

それにつれて密着した布地の奥にある、細い身体にそぐわない弾力に気付く。

いいなあ。私なんてブレザーの胸のあたり、ブカブカだもん。

見比べて少し悲しくなった。

突然落ち込んだ私の顔を、不思議そうに覗きこむ君と視線がぶつかった時。電車が大きく揺れ  
、体に隠れて見えないところで手と手が触れた。

指先から肩まで、じんじん音をたてて痺れる。君と触れている部分を除いて。

「ゆいの手、冷たい！」

瞳を大きく開いた君が、温かい手で私の手を包んだ。

君のスキンシップはいつも自然。ずるいよー。心の中ですねてから手のひらを重ねる。すぐに指を絡めて繋いだ。どちらからともなく。

ふたりの体温が混ざり合う。痺れは消え、溶けてしまいそうな幸せな気分になる。

サラリーマンの黒やグレーの背中が二人を囲む壁に思えた。現実から切り離された世界。ずっと、このままでいられたらいいのに。

別れ際。

「明日も一緒に帰ろうねー」

ありったけの勇気を出して、わかりあってる事をわざと口にした。

カタチに出来ない想いを、見えない糸で紡ぐように。

## カタチに出来ない想い

<http://p.booklog.jp/book/85608>

著者 : yukishigurevo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yukishigurevo/profile>

表紙 : 写真屋水珠

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85608>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ